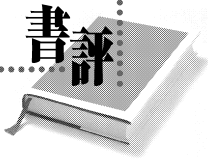


書評



日本精神神経学会小児精神医療委員会 監修
齊藤万比古, 小平雅基 編

臨床医のための小児精神医療入門

八木淳子

時代の要請から子どもの心の診療に関心を抱く精神科医, 小児科医は少なくない。さらには子どもの精神保健福祉, 教育, 司法などの分野に関わるあらゆる専門職, 支援者にも, 児童精神医学と子どもの心の診療についての基礎知識と専門性を求められる機会が増してきている。

しかし, 日常業務に忙殺される臨床医にとって, 児童精神科医療を学ぶことの重要性を理解してはいても, 教科書を通読するには時間がかかりすぎ, 地方では研修の機会すら得難い。現実には日々目の前の臨床に追われるうちに, どこから手を付けたらよいのか迷いながら, なんとなく苦手な領域として残ってしまうのが, 子どもの心の診療に関する分野ではないだろうか。

本書の編著者であり現代日本を代表する児童精神科医の一人である齊藤万比古氏は, 子どもの心の蹟き(精神障害)を, 生物学的・心理的・社会(環境)的要因が均衡を保つことで成り立っている子どもの「自己システム」が, その平衡を保てなくなったときに引き起こされるものとして捉え, 包括的な支援の大切さを一貫して強調されてきた。東日本大震災後に設立された児童精神科医療施設「いわてこどもケアセンター」(岩手医科大学)の開設記念講演においても, 児童精神科医療の役割は, 心の病気を改善するための手助けをし, 環境を整え, 学校(社会)と子どもをつなぎ, これらをまとめ上げながら熟成の時を待つことであり, 子ども自身の成長を愚直なまで見守り, 付き合い続ける包括的・総合的な営みが大切であると説いておられた。本書中でも齊藤氏が提案する「三次元的な治療構造」は, 東日本大震災で被災し, 傷ついた子どもたちの長い長い心の復興の道のりを, とともに歩み, 見守り支え続けること

にも相通ずる臨床哲学である。

このような基本理念を背景として齊藤氏らが本書で提示するのは, 子どもの心の診療に取り組む上で欠かすことのできない, 臨床的専門性獲得のためのエッセンスである。総論では子どもの精神・神経発達, 母子関係, エビデンスに基づく治療など基本的概念が示され, 各論では児童青年期に見出される諸精神疾患の各病態がその分野のエキスパートによってコンパクトに分かりやすく解説されている。さらに, 疾患概念では捉えられない, 虐待や不登校などの子どもの心の問題に特有の現象や, 検査や診立てのためのケースフォーミュレーション, 各種治療介入技法の解説, 今後期待される新たな治療技法の紹介なども加わり, 児童精神医学と子どもの心の臨床を取り巻く技術的側面が具体的かつ広範囲に網羅されている。各項目は理解度を自己点検するためのチェックリストを含み, めざすレベルに合わせた研修の達成目標が段階的に明示され, 各治療技法の推奨の度合いも示される。項目ごとに文献や推薦図書が記載されていることも, より深い学びへの助けになる。初学者には研修のための道標に, 児童精神科を専門分野とする医師にとっては自己の習熟度を点検しつつ, 指導者としてなすべきことの指針となる。本書は子どもの心の診療にかかわるすべての人にとって, 有用で実際の示唆を与えてくれる貴重な手引書である。

(岩手医科大学・神経精神科学/いわてこどもケアセンター副センター長)

●B5 240 頁 2014 定価: 本体 3,600 円+税
医学書院刊